

世界文学を読み ほどく

—— 映画文学人生論

池澤夏樹 (1945-)

『世界文学を読みほどく』(2005) 「新潮社」

『池澤夏樹=個人編集 世界文学全集』(2007-11)

『読書癖』(1991) 「読書癖」

『池澤夏樹の世界文学リミックス』(1911

「河出書房新社」

この世界はどういうところで、自分たちは
どこで生きているか

池澤直樹の『世界文学を読みほどく』は、二〇
〇三年の九月に行われた京都大学文学部の夏期特
殊講義の講義録で、「スタンダールからピンチョ
ンまで」という副題がついている。とりあげられ
た世界文学十作品は次の通り。

スタンダール	パルムの僧院
トルストイ	アンナ・カレーニナ
ドストエフスキー	カラマーゾフの兄弟
メルヴィル	白鯨
ジョイス	ユリシーズ
マン	魔の山
フォークナー	アブサロム、アブサロム！
トウエイン	ハックルベリイ・フィンの冒険
ガルシア＝マルケス	百年の孤独
ピンチオン	競売ナンバー49の叫び

私にまがりなりにも読んだことがあるのは十作
品のうち八作品。『ユリシーズ』のように随分て
こずって、バカの壁につきあたったような苦い経
験をなめさせられたことがあるが、今となっては
それもなつかしい思い出一応、受講資格はある
ような気がする。

ところが、『池澤夏樹=個人編集 世界文学全
集』の三十数作品には私が読んだ作品がほとんど



世界文学を読みほどく _____ 映画文学人生論

ないのには愕然とした。世界の文学作品はこの半世紀にも続々とつくられているのに、私はその潮流に置き去りにされていたのだ。

本書によれば、全体の流れとしては、「スタンダールからピンチョンまでの、この二百年近い間で小説がどう変わったか」をあとづけてみて、それから、ではこの先どうなるのか、その変化はいかなる理由によるかを、考えてみよう。特に、「この世界はどういうところか、自分たちはどこで生きているか」という世界観との関係で捉えていきたいという。

このような読み方なら、世界文学十作品が自身の生き方とかかわりがある身近な書になるのかもしれないが、異国の貴族や僧職者の生活や思考は私の生活感情とはかけ離れている。船乗りの生活はいくらか理解できるが、捕鯨が消滅した現在、『白鯨』を精読することが、私自身の生き方にどれほどの影響が期待できるだろう。

十作品のうち『アブサロム、アブサロム!』と『競売ナンバー49の叫び』が今のところ私の未読作品だが、はたして読破しようという気力が私の内部から湧いてくるかどうか。

『池澤夏樹II個人編集 世界文学全集』の三十数作品とともに、残念ながら、今生では無縁のままで終わりそうだ。

月天心貧しき村を通りけり 与謝蕪村